# 18［評論］『分類思考の世界』

　万華鏡のごとくする存在の世界を生物としてのヒトは生きてきた。ある日、目の前を横切った動物は「Ａ」という分類カテゴリーに属し、その日のａショクタクに並んだ野菜は「Ｂ」というカテゴリーの植物である。共時的な存在の多様性を日常生活の中で理解するには、おおまかにざっくりとカテゴリー分けして、それぞれにわかりやすい名前を付ければよい。

　では、継時的な存在の可変性についてはどうか。ある日、野原でｂシュウカクしてきた果物が翌日には黒くｃクサってしまったとしよう。存在の姿形すなわち外的な特徴は大きく変化し、何よりも前の日には食べられたものが次の日にはもう食べられなくなった。これはヒトの生存を左右する重要なできごとである。［　　Ⅰ　　］、継時的に特徴が変化したからといって、別のものになったわけではない。外見的には変化しても①「ほんとうは同じものである」という認識があってはじめて、存在は変化するのだという意識が生まれたのだろう。

　外見的に異なるものは別の存在であるというのでは、変化そのものが認知できないではないか。時空を超えた同一性という認識があればこそ、ある時点「t1」の「Ｘ」は別の時点「t2」の「Ｙ」と同じ存在であり、t2―t1のα［時間］経過によってＸからＹへの継時的変化が起こったと言えるからだ。そもそも、命短い生物の目まぐるしい姿形の変わりようはもちろん、β［相対的］に長い時間をかけて変化する無生物であったとしても、外見が変化するたびに別々の存在とみなすのでは、ヒトのもっている識別能力をあっさり越えてしまうだろう。

　②認知カテゴリー化という生得的能力によって、私たち人間は存在の共時的な多様性を理解できるようになる。では、存在の継時的な可変性に対して、生物進化の過程はヒトにどのような能力を与えたのだろうか。それは「時空的同一性（spatio-temporal identity）」の認知だと私は考えている。時空軸に沿って存在が変化したとき、それらを互いに無関係な別個の存在とみなすのではなく、ある本質的属性を共有する存在のカテゴリーとしてひとまとめにすることにより、継時的な可変性を理解する能力が私たちにはあるということだ。

　このようにして、「ものを分類する」という行為は、共時的だけでなく、継時的にも実行できる。ｄゲンショウ世界における千変万化の存在の様態を人間が理解するための窮余のｅサクとしてカテゴリー化は発動される。そして、いずれの場合も、それらのカテゴリーを背後でしっかりと支えているのは「同じものである」という私たちの側の認識である。このとき重要なことは、③存在の側で客観的に見て「同じものである」かどうかは問題ではないという点だ。単に心理的に「同じものである」とみなされればそれで十分だ。［　　Ⅱ　　］、ここでもまた私たちは自らの「心」が産み出したものに向き合うわけだ。

●語注

万華鏡＝鏡で作った三角形の筒の中に切った色紙などを入れ、回しながらのぞくおもちゃ。

問１　二重傍線部ａ〜ｅのカタカナを漢字に直せ。2点×5

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問２　［　］α・βの対義語を漢字で答えよ。4点×2

α〔　　　　　　〕 β〔　　　　　　〕

問３　空欄Ⅰ・Ⅱに入る語句の組み合わせとして最も適当なものを次から選べ。4点

ア　Ａ＝ところが　Ｂ＝もし

イ　Ａ＝やがて　　Ｂ＝そして

ウ　Ａ＝しかし　　Ｂ＝したがって

エ　Ａ＝そして　　Ｂ＝しかし

オ　Ａ＝さらに　　Ｂ＝やがて

〔　　　〕

問４　傍線部①を言い換えている箇所を本文中から三五字以内で抜き出せ。7点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　傍線部②について詳しく述べている段落はどこか。段落番号で答えよ。6点

〔　　　〕

問６　傍線部③と述べるのはなぜか。その理由を答えよ。8点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問７　本文の内容と合致していないものを次から一つ選べ。7点

ア　「ものを分類する」という行為は、共時的にも継時的にも可能である。

イ　ヒトは、日常生活の中で多様な存在をカテゴリーに分けて生活している。

ウ　生物進化の過程は、ヒトに継時的な可変性を理解する能力を与えた。

エ　外見的に異なるものをも、ヒトは同一の存在とみなすことができる。

オ　継時的な存在の可変性とは、時間の経過により存在そのものが変化することである。

〔　　　〕

【解答】

問１　ａ食卓　ｂ収穫　ｃ腐（って）　ｄ現象　ｅ策

問２　α空間　β絶対的

問３　ウ

問４　ある本質的属性を共有する存在のカテゴリーとしてひとまとめにすること（33字）

問５　［１］段落

問６　カテゴリー化（「ものを分類する」こと）は、人間が世界を理解するためのものだから。（傍線部の内容がなければ×）

問７　オ

■覚えておきたい語句

□5　継時的…………………時間的順序にしたがって、物事がなされるさま。

□5　可変性…………………変えることができること。〔反〕不変性

□15　生得……………………生まれつき。

□18　属性……………………そのものが持っている性質。

□21　千変万化………………さまざまに変化すること。

□21　窮余の策………………追いつめられて、困ったあげくの一手段。

〔要　約〕

　［1］段落（共時的な存在）と

［2］～［4］段落（継時的な存在）の対比関係をつかむことがポイント。

　　　　↓

共時的な存在の多様性を理解するには、カテゴリー分けをして、名前を付ければよい。継時的な可変性に対し、人は「時空的同一性」の認知能力を持つ。ものを分類する行為は、同じものであるという人間の認識である。（99字）

〈筆者＆出典〉三中信宏（みなか・のぶひろ）一九五八年（昭和33）京都府生まれ。国立研究開発法人農業環境技術研究所生態系計測研究領域上席研究員。東京大学大学院農学生命科学研究科教授。専門は、進化生物学・生物統計学。著書に『系統樹思考の世界―すべてはツリーとともに』『進化思考の世界―ヒトは森羅万象をどう体系化するか』などがある。本文は、『分類思考の世界―なぜ人は万物を「」に分けるのか』（講談社現代新書、二〇〇九年）より。

【読みのセオリー】

★対比をつかむ

　対比とは、二つのものを比べ

てその相違や特性をはっきりさせる技法である。対比は、二つが並べられるのだから、何と何が対比になっているかをまずはっきりさせる。そして、どのような違いがあるかをおさえていけばよい。

　問５においては、「共時的」「継時的」の二つの対比から段落を見分ける。

■読みのセオリー［実践］対比をつかむ

問５ 「②認知カテゴリー化という生得的能力」は、「共時的」「継時的」のどちらに関わっているのか？

　傍線部②のすぐ後に、「私たち人間は存在の共時的な多様性を理解できるようになる」とある。

　　　↓

　つまり、「認知カテゴリー化という生得的能力」は、

［１　　　　　　　　　　　　　　　］

な存在に関わるもの。

　2段落と3段落は、

［２　　　　　　　　　　　　　　　］

な存在について述べている。

そうすると、……。

〔解答〕　１共時的　２継時的

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊差し替え

問２　［　］α・βに入る適当なものを後から選べ。

　ア　相対的　　イ　絶対的　　ウ　抽象的　　エ　時間　　オ　空間　　カ　未来

［答］　α＝エ　　β＝ア

＊差し替え

問４　８〜９行目「外見的には変化しても『ほんとうは同じものである』という認識」を本文中の語句を用いて五五字以内で説明せよ。

［答］　ある本質的属性を共有する存在のカテゴリーとしてひとまとめにすることにより継時的な可変性を理解するという認識（53字）